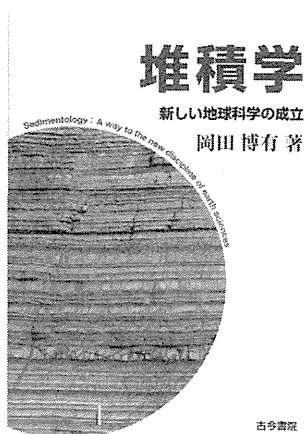


書評：堆積学

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-05-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池谷, 仙之 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00025095

書評



本の紹介：堆積学—新しい地球科学の成立— 岡田博有著

古今書院、2002 年 5 月 15 日初版発行、A 5 判、219 pp、3,500 円 (税別)

本書を紹介するには、まず著者のプロフィールを紹介した方が手っ取り早い。なぜなら、本書は堆積学ひとすじに歩んでこられた著者の研究歴から生まれたものであり、この著者を描いて、本書の執筆は成し得ないからである。

著者は九州大学で地質学を学び、学位論文は砂岩の堆積学的研究であった。九大の助手時代、イギリスのレディング大学堆積学研究所に留学され、本書にも紹介されている堆積学を築いてきた多くの著名な学者との知己を

得ると共に、堆積学研究に対する国際的な視野を得た。帰国後、鹿児島大学教養部の教授を経て、1976 年、静岡大学理学部に新設された地球科学科海洋地質学講座の初代教授に就任され、本学が海洋地質学の研究と教育において世界的な評価を得る基礎を築かれた。岡田教授が在籍した 12 年間、静大には国内外の著名な地質学者や堆積学者の他に多くの留学生が出入りしたことは本会会員の皆さんのよく知るところでもある。その後、母校の九州大学に戻られ、理学部地球惑星科学科海洋底地球科学講座を担当された。この間、学会では堆積学研究会の代表や日本地質学会の会長などを歴任され、国際深海掘削計画や日仏 KAICO 計画をはじめ、常に国際的研究プロジェクトのリーダーとして活躍された。ご自身の研究では、堆積学・堆積岩岩石学を中心に、海洋底地球科学、テクトニクス、層序学など堆積学に関わる広範な学問分野を手がけられた。初期の頃に提唱された「岡田ダイアグラム」は地質学を学ぶ者なら、必ず一度は遭遇した砂岩の分類法ではなかったろうか。逆グレイディングの成因や砂火山の形成機構、また、上方粗粒化シーケンス・再堆積礫岩などの地質学的意義付けなど、注目すべき研究成果に溢れていることは私が紹介するまでもない。

このように本書は、著者がこれまでに学び、研究してきた過程をそのまま順序立てて解説したものであり、退官後に教科書として纏められた。本書は次のような 9 章から構成されている。1、2 章は「堆積学とは」、「堆積学はどのようにして確立されたか」を地質学史の中に位置づけ、3、4、5 章で本書の柱となる「堆積学」、「堆積岩石学」、「層序学」の基礎的概念とそれらの成立を学史的に解説している。6 章には「欧米 3 学派とそれらの組織化による堆積学確立の経緯」が、また、7 章には「海洋底研究によってもたらされた新しい堆積学の具体的な成果」が紹介されている。8 章は「日本における堆積学の成立過程」が 10 年ごとの研究成果と共に分析されている。最後の 9 章は「21 世紀の堆積学」として「堆積学と層序学の統合」と「惑星堆積学」を取り上げている。

地質学にとって堆積学は基礎の基礎であって、堆積学を抜きにして地質学は成り立たない。このような「堆積学」とはどのような学問分野なのか。そしてそれはどのようにして発展してきたのか。本書はこの疑問にダイレクトに答えてくれている。

本書が初心者にも読みやすく、親しみやすいものとなっているのは、全編を通して堆積学を築いてきた人々（42 人も）の肖像が随所に適切に掲載されていることによるかも知れない。これらの写真やスケッチは、その大部分を著者が独自に収集したり、また、ご自身で撮影したもののように、「この研究はこの人がしたのか」とか「名前は知っていたけれど、このような風貌の人だったのか」など、頁を繰るたびにそんな楽しみ方もできる。また、文章が実に簡潔、かつ明瞭であるのは、著者をよく知る者として、著者の性格と平素の研究態度がそのまま本書に現れたように思える。また、本書に現れたもう一つの特徴は、末尾に 35 p も使って引用文献（700 編に及ぶ）を載せていることである。このことも、すべて原典に当たって正確を期するという著者の性格が反映されている。これだけの数の引用文献を事項と共に上げてあるだけでも、この本の価値は高い。

私事で恐縮であるが、私もまもなく定年を迎えようとしている。大学で教壇に立つ者として、近頃感じることは、講義の中である事項の史的背景を解説することの意義を大切にしたいのだが、学生の方は一向に関心がない。つまり、「誰が研究したのか、それがいつ頃だったのか、そんなことはどうでもよい」という風潮が強くなり、すぐ眠くなってしまう。そこで、講義する方も面白そうな結果とさわりの解説ですませ、研究者の名前がでてくことはほとんどなくなってしまった。したがって、最近、大学で「堆積学」あるいは「地層学」の講義を受けた学生に、先の堆積学の基礎を築いた 42 人の研究者のうち何人を知っているか聞いてみたいものである。恐らく、一人も知らないという寂しい結果が予想される。この人たちの研究の上に現在の研究があることを知らねばならない。本書はこのような観点からも読んでもらいたい。

池谷仙之（静岡大学理学部）